

言語形式面からみた日本語学習者の文章の研究 — 論理的文章作成を目指して —

田代 ひとみ

1. はじめに

日本語学習者の文章の中には、理解しにくい文章が散見されるが、どのような問題があるのであろうか。そこには日本語母語話者の書く、理解しにくい文章とは異なる問題があると思われる。これは日本語学習者の日本語能力が不十分であることが原因の一つである。

近年、日本語教育は言語面以外の分野への注目が高まっており、ライティング指導でも、ライティングのプロセスに関する研究が多く行われている。しかし書かれた文章、つまりプロダクトについても依然として未解明なことは多い。そこで、学習者の文章のどのような点に問題が起りやすいかという視点から研究することもやはり必要であろう。

日本語学習者の文章に関しては、これまで、文章構造の研究(楢本 1997 等)、文章展開の方法に関する研究(板東 1997 等)が多く行われている。しかし、問題は 1 文単位の言語的問題にもあると考えられる。そこで本研究では、ストーリー説明文と意見文を対象に日本語学習者の文章を分析し、その特有の問題は何かを探ることとする。そしてそれを日本語ライティング指導に資する基礎研究としたい。さらに、それがアカデミックジャパニーズやビジネスジャパニーズで必要性が高まっている論理的文章作成に向けて、何らかの示唆が与えられることを目指す。

本研究では 2 章と 3 章でストーリー説明文、4 章と 5 章で意見文を対象とする。2 章で CN と KR の文章に表れた表現をそれぞれ JP と量的に比較する。3 章では同じデータを JP の読み手がわかりやすさから評価し、低評価の学習者の文章を高評価の文章と比較して、その特徴を探る。4 章では CN の文章に表れた表現を JP と量的に比較する。5 章では CN、KR、JP による 4 章と同じ課題の文章を JP の読み手が評価し、低評価の学習者の文章を高評価の文章と比較する。これらの結果から日本語学習者の文章

の言語的問題を明らかにしようとするものである。

2. 中上級日本語学習者のストーリー説明文の問題

2.1 問題の所在と研究目的

日本語学習者の文章のプロダクトの研究は、かつては誤用に注目した研究が多かったが、表れた表現を分析する研究が行われるようになった。押谷(1989)は、高校生・小学生・留学生の要約文を分析し、単文・複文の使用や、情報への言及を比較した。札野(1991)では、文章に表れた接続詞を調査し、理解できている接続詞だけを使用していることが明らかになった。また桜田(1991)ではテ形接続の前件と後件の結びつきを調べ、その選択の難しさを指摘している。

一方渡邊(1994)では、口頭表現において、日本語ストーリー説明のプロダクトを母語話者別に分析し、母語によっては視点の移動が起りやすいという結果になった。これは文章においては未解明である。

そこで本調査では、日本語学習者の使用する表現の特徴を知るために被調査者に同一課題を課して、JP の文章と比較することにした。

2.2 調査方法

JP 30 名と中上級の CN30 名、KR 30 名に、10 コマのマンガのストーリー説明文を 300 字程度の日本語で書くよう指示した。

2.3 結果と考察

伝えるべき情報の量を比較すると、CN、KR も JP と同様に言及していた。次に従属節末の接続助詞で多く使用されたものをみると、JP はテ形中止接続と連用中止接続を組み合わせて使用しているが、CN、KR はテ形中止接続を多用していた。また、CN は(1)のように、1 文中で主語が交替する場合もテ形中止接続を使用している。

(1)二人はどちらも自分のせいじゃないとけんか
しはじめて、そのボーイフレンドは頭にくるな文

句を*いわれて*、怒ってしまいました。[CN]

さらに視点に関しては、JP は主人公中心の表現が多いが、CN、KR はそれ以外の人物中心の表現が見られ、これらが不自然さの一因と思われる。

3. わかりにくさという観点からみた日本語学習者のストーリー説明文

3.1 問題の所在と研究目的

2章で CN、KR の文章と JP の文章との相違点が明らかになったが、浅井(2002)は 1 文単位の問題をより詳細に分析するため、JP と上級 CN の書いた意見文を比較した。JP は連体節を多く用い、CN は副詞節を用いており、節間の論理展開の違いがわかりにくさの一因になるのではないかとした。

しかし、文章がわかりにくいかどうかは、文章自体を分析するだけでは不十分で、読み手の判断が必要になると考えられる。

わかりにくさとは、多くの要素が絡む問題であるが、日本語学習者の場合、ボトムアップの問題も、読み手の文章理解に支障を起こす原因として看過できない。それを調査する場合、同一内容を述べる文章は、言語の問題に焦点を絞ることができる。そこで、本研究では 2 章で調査対象とした JP、CN、KR の文章を対象に、JP の読み手が評価を行い、日本語学習者の低評価群の文章は高評価群の文章と比較してどこに問題点があるかを探ることとした。

3.2 調査方法

2章で収集した JP、CN、KR の文章データを、JP の読み手 3 名が評価を行った。評価基準は JP へのインタビューを通じて挙げた「事実の説明」「情景描写」「背景説明」「表記・語彙」「文法・文のつながり」の 5 項目を各 1~3 点 (計 15 点満点) で採点した¹⁾。同時に、読み手が文章の中で理解に支障をきたした部分にも下線を行くよう指示した。

3.3 結果と考察

読み手が理解に支障をきたした部分は、高評価群ではほとんどなかったが、低評価群では語彙・表現が多く、次に統語が多かった。これらは、これまでの研究であり指摘されなかった点である。しかし、「理解に支障をきたす部分に下線を引く」という方法では、語彙・表現や統語の誤用等に注目が集まりやすい。

そこで高評価群と低評価群の量的な比較分析をすると、情報の言及数、必要情報の言及数で低評価群

の平均が高評価群の平均より少なく、有意差があった。これは 2 章の調査の結果と異なる。従って、低評価群は、情報量が少ないという点がわかりにくさの一因となっていると思われる。

表 1 情報言及の平均

	高評価群	低評価群	t 検定
情報の言及数	14.96 (1.65)	12.96 (1.97)	**
必要情報言及数	10.96 (0.94)	9.40 (1.62)	**

(* ** = $p < .01$, * = $p < .05$)カッコ内は標準偏差

一方、1 文内の問題での比較では、文の数、1 文あたりの文節数、1 文あたりの従属節数の補足節の平均値に有意差が見られず、副詞節、連体節、並列節でも同様であった。

しかし、低評価群・高評価群とももともと使用数が多かったテ形中止接続・連用中止接続を比較すると、テ形中止接続は低評価群に多く、連用中止接続は高評価群に多く、両者とも有意差が見られた。これは 2 章の結果と同じである。

さらに増田(2001)の指摘と同じく、学習者は連体節の非限定用法の使用が少ないことが明らかになった。非限定用法の連体節は、連体節と主節が原因理由・逆接・継起・付帯状況等の意味的關係を持つ以下のようなものである。

(2) せっかくのプレゼントをなくしてしまった太郎君 [→原因理由] に 腹を立てた花子 [→原因理由] は、ガツンと一発太郎君の頭をなぐり、泣きじゃくる彼 [→付帯状況] をそのままにして、プリプリしながら、帰って行った。[JP]

結束性に関連する接続詞と指示詞の使用は量的には有意差がなかった。本研究では、わかりにくさの問題は、文と文をつなぐ部分より 1 文内の構造と言及している情報数に多く見られた。こうしたことから、これまではあまり注目されていなかった語彙や、命題間の論理的な接続にも留意すべきことが示唆された。

4. 中級日本語学習者の意見文の論理表現

4.1 問題の所在と研究目的

2 章と 3 章の研究は、マンガのストーリーに沿って時系列に内容を述べる文章であったため、理解に支障をきたすような大きな問題は起きなかった。しかし書き手がそれぞれの論理を展開する意見文等では、異なる結果が予想される。また、条件・譲歩の表現等、日本語学習者にとっては比較的難しいと思

われる表現も多く使用されると思われる。そこで、4章と5章では意見文を対象とした調査を行う。

言語形式面では、複文（接続節²を持つ文）や接続詞が意見文の論理関係に関わるとと思われる。

複文では、因果関係を表す条件（「と」「ば」）、譲歩（「ても」）、原因・理由（「から」「ので」）、逆接（「のに」）の接続節であるが、それ以外にも並列節の順接的並列の累加「し」、逆接的並列「が」「けれども」等である。

接続詞については市川(1978)に従い、以下のように分類した。①順接（「だから」「それで」等）②逆接（「しかし」「だからといって」「ところが」等）③添加（「そして」「また」等）④対比（「一方」「あるいは」「むしろ」「まして」等）⑤同列（「つまり」「結局」「たとえば」等）⑥転換（「ところで」「それでは」等）⑦補足（「なぜなら」「というのは」「ただし」等）

本調査では上述の接続節と接続詞を、論理展開を担うものと考え、分析の観点とする。

4.2 調査方法

国立国語研究所作成「日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース ver.2 正式公開版」に収録されている CN33 編、JP44 編の日本語作文「たばこについてのあなたの意見」（喫煙規制に賛成か反対か）を資料とした。CN は学習時間が日本語能力試験 1 級未満と考えられる者にした。

4.3 結果と考察

CN の原因理由の節の数は JP と有意差がなかったが、JP は文末表現や名詞文の使用（「理由はー」「ーが理由である」）、並列節の「し」等、多様な表現を用いて理由を表していることが多いため、全体としては CN より多いことがわかった。条件節の使用においては、CN は恒常的条件で根拠を示し、JP は仮定条件で反論を行うことが多く見られた。

さらに、CN は逆接的接続（逆接の接続詞、逆接的並列「が」「けれども」等）の使用が JP より少なく、順接的接続の使用が多いという特徴がみられた。また同列・補足の接続詞に関しては「たとえば」以外はあまり使われていないという結果が出た。

井上(1989)は、書き手が意見の理由付けだけでなく主張の反証、例外、制限について予め出し、それを反駁したり、対策を述べたりすると論が完璧になるとしている。これらの表現は JP に多く、CN に少なかったことから、意見の主張をする上で、論理

的に弱くなることが考えられる。

中級レベルの CN のこのような特徴は中国語における論理展開の影響も考えられるが、中級レベルであるために言語面に注意が向かってしまい、内容面に配慮が行き渡らなかったという可能性もある。

5. 中級日本語学習者の意見文における読み手の理解を妨げる要因

5.1 問題の所在と研究目的

齋山(1997)では、課題作文における読み手の期待するテキストを分析するため、得点の高かった作文と低い作文ではそれらがどう実現されているかを比較した。その結果、得点の高い作文は読み手の期待する文章構造、論点が実現されており、その論点を有効な主論・対論として成立させているが、得点の低い作文はこれらのいずれかで失敗していることが明らかになった。しかし言語的特徴について読み手の評価別に分析した研究は、管見ではまだない。そこで3章と同様に、低評価になった日本語学習者の文章を高評価の文章と比較し、言語面の特徴を探る。

5.2 調査方法

4章と同じデータベースに収録されている CN35 編、JP35 編の日本語作文「たばこについてのあなたの意見」（喫煙規制に賛成か反対か）の中の JP35 編、CN35 編³の文章データを、JP の読み手 3 名が評価を行った。評価基準は JP へのインタビューを通じてあがった「意見と理由」「比較」「段落の分け方の適切さ」「構成の適切さ」「素材のユニークさと幅広さ」「素材の説得性」「表記・語彙」「文法」の 8 項目を各 1~3 点（計 24 点満点）で採点した。

5.3 結果と考察

はじめに低評価群 30 編を高評価群 29 編と量的に比較した。その結果、論理的表現を支える従属節に有意差のある項目はなかった。低評価群の文章を内容的に見ると、課題に答えていない文章、意見の日本語が明示的でない文章等が多くみられた。本研究では課題に答えようとしているが、わかりにくい文章の言語的特徴を見ることを目的としている。そこで課題には答えているが、高評価群には入らなかった群（＝課題回答群）28 名を高評価群と比較した。

課題回答群と高評価群の量的な比較を行うと、順接の接続詞の使用が有意に多かった。しかし、論理関係を明示的に示さない順接的並列関係（総記）の節は高評価群の方が高い。量的な分析では、高評価

群のほうが論理関係を示さない接続節が多いということになる。次に内容面の分析を行うと、課題回答群は、主張の根拠部分の分量が少ない、導入部分が多い、根拠として説得力に欠けるという問題が高評価群より多く見られた。以下のような例である。

(3)「たばこをやめよう」とは無理ですけど、「公共の場所で吸わないよう」とは筋が通るはずで。「吸わせられる人」の中にはたばこが大好きという人もいますし、たばこに過敏な人もいます。私の週りの人の中にも、自分の赤ちゃんのために、たばこをやめたという人がいますが、家族以外の人にしばらくたばこをやめましょうということは無理ではないでしょう。それはたばこを吸う人の権利というよりも、吸わない人にの義務だといった方がよいと思います。ですから、「規則を作って禁止するのはおかしくない」。[CN]

このように課題回答群は、論理的表現の使用に大きな差はないが、内容面に問題が見られた。

6. まとめと今後の課題

ストーリー説明文と意見文を対象に日本語学習者の文章の言語的問題を探った。

ストーリー説明文の母語話者別の分析では、テ形中止接続の使用の多さと視点の移動に相違が見られた。しかし読み手の評価別に分析を行うと、述べられている情報の言及数に差が見られた。

意見文の分析では、CN の文章に、順接を多く使用し、逆接はあまり使用せずに論理を展開する等の特徴が見られた。しかし評価別では、順接の接続詞の使用が多い点以外、大きな相違は見られなかった。このように日本語学習者による、わかりにくい意見文は、論理的表現に関しては JP とほぼ同様に使用しているが、論理の内容面に問題が見られた。論理的文章の作成では、論理的な言語形式で接続されているように見えても、命題の妥当性について検討するなど、内容面への配慮も重要であると言えよう。

注

1. なお、高評価群・低評価群それぞれの評価項目の平均点の比較を行ったところ、全てにおいて有意差があっ

たことから、日本語の項目だけに差があるわけではないことが確認できた。これは 5 章の調査でも同じ結果であった。

2. 本稿の節の分類は益岡・田窪(1992)に基づく。複文は、主節と接続節で構成され、接続節は従属節(補足節・副詞節・連体節)と並列節に分類される。
3. 3章のCNのデータは学習時間が日本語能力試験1級未満とみなされる者だったが、4章はその限りではない。従って、3章と4章のデータは一部異なる。

参考文献

- 浅井美恵子(2002)「日本語作文における文の構造の分析 - 日本語母語話者と中国語母語の上級日本語学習者の作文比較-」『日本語教育』115号, pp.51-60 日本語教育学会
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 井上尚美(1989)『言語論理教育入門』明治図書 pp.107-114
- 押谷佑子(1989)「要約文と理解」『日本語教育研究論集』第4号, pp.4-15 東北大学教養部日本語研修コース
- 齊山弥生(1997)「読み手の期待と作文の質」『産能大学紀要』第18巻第1号 pp.13-24
- 桜田千采(1991)「外国人の作文における『動詞連用形+て』の問題点」『金沢大学外国人留学生の日本語作文分析編』pp.45-57 金沢大学教養学部
- 根本総子(1997)「意見文の構造 - 中・上級学習者の作文における問題点-」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』創刊号, pp.79-91
- 田代ひとみ(1995)「中上級日本語学習者の文章表現の問題点-不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる-」『日本語教育』85号, pp.25-37 日本語教育学会
- 板東正子(1997)「日本語学習者の文章における文脈展開」『日本語・日本文化研究』第7号, pp.213-225 大阪外国語大学日本語講座
- 札幌寛子(1991)「留学生の作文に見られる接続詞の使い方に関する調査」『金沢大学外国人留学生の日本語作文分析編』金沢大学教養学部
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法-改訂版-』くろしお出版
- 増田真理子(2001)「(談話展開型連体節) - 「怒った親は子どもをしかった」という言い方-」『日本語教育』109号, pp.50-59 日本語教育学会
- 渡邊亜子(1993)「中・上級日本語学習者の談話展開- 文の接続と『視点』からの考察-」お茶の水女子大学修士論文

たしろ ひとみ/明海大学 外国語学部日本語学科
htashiro@meikai.ac.jp